

## 情報リソースを示す文型について

### —アカデミック・ジャパニーズにおける引用表現に関する検討—

田 中 佑

#### 1. はじめに

本稿は、アカデミック・ジャパニーズ<sup>1</sup>における引用表現に関する従来の研究で取り上げられてきた文型を検討し、それぞれの文型間の関係性を明らかにしようとするものである。

「他者の知見を、自身の知見に対して相対的に位置付け、反論・援用するために導入する言語行為」としての「引用」を表す表現は、盗用・剽窃問題との関係もあり、アカデミック・ジャパニーズ研究における重要な研究テーマの一つとされ、次に示すような「情報リソースを示す文型」をめぐって様々な観点から議論が積み重ねられている。

- (1) ～は…と述べている。／～では…と述べられている。
- (2) ～は…ことを指摘している。／～では…ことが指摘されている。
- (3) ～ {によると／によれば<sup>2</sup>}，… (という)。
- (4) ～が述べているように，…。

これらはすべて上述の意味での「引用」を表すと解釈される文型である。以下、(1)を「ト引用文」、(2)を「コト埋め込み文」、(3)を「ニヨルト文」、(4)を「ヨウニ文」と呼ぶ。

従来のアカデミック・ジャパニーズにおける引用表現研究では、ト引用文、ニヨルト文は多くの研究で取り上げられているが、コト埋め込み文、ヨウニ文が取り上げられることは少なく、また、各文型の文法的な性質が考慮されていない場合がほとんどである。しかし、文法的性質を踏まえておかなければ、文型の適切な分類や体系化は実現できない。

以上を踏まえ、本稿では、「情報リソースを示す文型」について、典型的な引用表現であるト引用文と他の文型の比較を行い、「他者の知見を、自身の知

見に対して相対的に位置付け、反論・援用するために導入する言語行為」を表す引用表現の記述には、ト引用文とコト埋め込み文の関係と、ト引用文とニョルト文、ヨウニ文の関係を異なるものと捉えることが有効であることを示す。

## 2. 先行研究

アカデミック・ジャパニーズにおける引用表現に関する従来の研究では、どのような文型を取り上げるかが定まっていない。そのことを確認するために、ここでは、引用表現を総体的に取り上げようとしている清水まさ子 (2008)、二通信子 (2009)、山本富美子・二通信子 (2015) について概観する。

清水まさ子 (2008) は日本語母語話者向けのレポート・論文作成のための参考書 11 冊、留学生向けの参考書 1 冊を対象に調査を行い、そこで紹介されている引用方法を以下の 7 つにまとめている。

表 1 清水まさ子 (2008) による引用方法の分類

	引用方法	例
1	前文で引用文献名を紹介、後文で引用文献の詳細を書く <sup>3</sup>	橋本俊昭教授は、2006年6月に公表された論文において、現代日本の教育と格差の拡大との関連について、次のように指摘されている。
2	引用文献名を主語とする直接引用	渋谷 (1993) は、「実現系の可能は、様々な条件によって、ある動作を実現することが可能・不可能である・あったことを表わす」としている。
3	引用文献名を主語とする間接引用	教育哲学者宮寺は、この「個人差」と「集団差」との関係を、「格差」と「偏差」という用語で整理している (宮寺 2006)。
4	引用文献名を主語としない：文全体が引用文献の要約になっている。	たとえば『続日本紀』の苑卒伝などには本文に見えない記事や相違をふくむものがあり、貴族の家伝をもとにした式部省監修の「功臣家伝」が認められる。
5	引用文献名を主語としない：節が引用文献の要約となっている。	平野説に疑義を唱え5世紀半ば頃とする志田淳一説や、雄略期を少し遡る5世紀半頃、後にウヂの組織が広まるとする前之園亮一説など相次ぐ。
6	引用文献名を主語としない：引用文献から語のみを引用する。	「意欲の格差」、あるいはそれに由来する「学びの逃走」(佐藤 2000) なるものがいかなる実態をもつものなのか、さらには、今日の、ある社会層に属する子ども・若者の現実の姿をそれらの言葉が本当に的確にとらえているのかといった点については、慎重な検討が必要であるが、ここではその問題に立ち入らないことにする。
7	引用文献名を主語としない：「～によると、～によれば」を用いて引用文献を紹介して、後続する文に要約を書く <sup>4</sup>	しかし、現代方言において加藤 (1997) が指摘するように、これらの連母音の融合は話者にとって非規範的な形として意識されやすいものである。

この分類では、ト引用文が2（および3）に、ニョルト文、ヨウニ文が7に含まれる。

二通信子（2009）は次に示すような引用表現の分類とモデルを提示している。

表2 二通信子（2009：67）による引用方法の分類

引用方法	例文	説明
直接引用	・（著者）は「……」と指摘する。 ・～は「……」ためである。	原文の一部または全体をそのまま引用している。
間接引用a	・（著者）は～と指摘する。 ・（著者）によれば、～という／である。 ・という説明が行われている。	原文の言い換えや要約を行って引用する。引用を示す動詞や「～によれば」などの引用を示す表現を使っている。
間接引用b	・～について（著者）の研究がある。 ・～の定義を用いる。 ・～は～である。	引用を示す表現はないが、文献番号などによって、他者からの情報であることが示されている。

		A 著者にフォーカス ←	→ B 事柄にフォーカス*1	
直接引用	引用表現あり	〈長い引用－独立した段落で〉 [著者] は次のように指摘している。 .....	〈長い引用－独立した段落で〉 ～についての次のような指摘がある。 .....	引用 ↑
		〈短い引用－語や文の切り取り〉 [著者] は「……」（頁）と指摘している。	〈短い引用－語や文の切り取り〉 「……」と指摘している。	
間接引用	引用表現なし	〈言い換え、要約〉 [著者] は～と指摘する。 [著者] によると、～という／～である。	〈言い換え、要約〉 ～と指摘されている。 ～という意見がある。	参照 ↓
		〈名詞化〉*2 [著者] は～（こと）を明らかにした。 [著者] は～の可能性を示唆している。 〈文献の存在の提示〉 ～については [著者] の研究がある。 [著者] の手法を用いて実験を行った。	〈名詞化〉 ～（こと）が明らかになった。 ～の可能性が示唆されている。	
		〈直接的な文の形〉 ～は～である。（事実／意見） ～については～と考えられる。		

\* 1 Bの場合は、文献番号によって出典をしめす。

\* 2 原文の内容を名詞の形にして自分の引用文に組み込む。

図1 二通信子（2009：71）による引用モデル

二通信子（2009）は、【表1】の「間接引用b」は文献番号や括弧書きで原著者の情報を示す「事実や他者の意見を直接的な文の形で示すタイプの引用」

であり、【図1】の「引用表現なし」に対応するとしているが、【図1】右側にある「参照」に関する説明がないため、どこまでを「引用」と捉えているのかは明らかでない。しかし、【表2】から少なくともト引用文、ニヨルト文、コト埋め込み文が【図1】の「引用表現あり」に含まれることはわかる。

山本富美子・二通信子（2015）は、引用表現は論理展開を構築する引用者の「解釈」を表す文との関係の中で捉える必要があるとし、次のような分類を提示している。

表3 山本富美子・二通信子（2015）による引用・解釈に関わる文の分類

	分類名	説明	特徴
A	中立的引用文	特定の中立的引用動詞を伴い、論文筆者の着目点を可能な限り忠実に再現し、中立的な立場からその着目点を示すという機能を担っている文	〈形式〉 ①～ハ／ニヨレバ＋直接／間接引用部＋ト＋「いう、述べる、記す、書く、ある」 ②～ハ／ニヨレバ次ノヨウニ＋「いう、述べる、記す、書く、ある」。ブロック引用
B	解釈的引用文	資料の著者・資料内人物の言語行動、思考、位置づけ、心的態度、背景的状况、事柄の要約を、解釈的述語動詞、動名詞、形式名詞、副詞句／節によって論文筆者の解釈の視点から引用・解釈し、論理展開の方向性を決定付ける文	〈形式〉 ①（副詞句／節）＋～ハ／ニヨレバ＋直接／間接引用部＋ト＋「いう、述べる、記す、書く、ある」以外の動詞 ②～ハ／ニヨレバ次ノヨウニ＋「いう、述べる、記す、書く、ある」以外の動詞、ブロック引用 ③直接／間接引用部＋トイウ＋論文筆者の解釈が含まれる動名詞／形式名詞＋デアル／格助詞
C	引用解釈的叙述文	引用標識「ト」の形式をもたず、論文筆者が資料の著者・資料内人物に寄り添い、その言語行動、思考、心理、背景を筆者自身の解釈を通して叙述している文	論文では当該文または前後の文で出典が示され、その資料以外からは知り得ない情報が記述されている
D	解釈文	資料に対して、論文筆者自身の解釈を示している文	引用解釈的叙述文と、構文上、判別困難

本稿が分析対象とする「情報リソースを示す文型」については、ト引用文とニヨルト文がA-①、B-①に該当する。

以上、アカデミック・ジャパニーズにおける引用表現を総体的に取り上げようとしている3つの先行研究について概観した。先行研究による分類にどの「情報リソースを示す文型」が含まれているかをまとめたものが【表4】である。

表4 先行研究で取り上げられている文型

	ト引用文	コト埋め込み文	ニヨルト文	ヨウニ文
清水まさ子 (2008)	○		○	○
二通信子 (2009)	○	○	○	
山本富美子・二通信子 (2015)	○		○	

【表4】に示したとおり、ト引用文、ニヨルト文はすべての先行研究が取り上げているが、コト埋め込み文、ヨウニ文については取り上げられない場合が多い。加えて、上述した先行研究には、なぜその文型を取り上げるのか（もしくは、取り上げないのか）に関する検討は見られない。

また、本稿では、(1)～(4)に挙げた「情報リソースを示す文型」はすべてアカデミック・ジャパニーズにおける引用研究で取り上げるべき文型であると考えが、文法論では、ト引用文は引用構文、コト埋め込み文は引用構文と隣接するがそれとは異なる文型として扱われる文型、さらに、ニヨルト文は「伝聞」、ヨウニ文は「比況」との関連で論じられてきたもの、といったように、これらはそれぞれ異なる文法的性質を有するものである。そのため、「情報リソースを示す文型」を分類・体系化しようとする場合には、各文型の文法的性質を踏まえる必要があると考えられる。しかし、先に概観した先行研究でそのような観点を考慮に入れたものは見られない。

そこで、以下では、典型的な引用表現であるト引用文と他の文型との比較を通して、3節でニヨルト文、ヨウニ文の位置付けについて、4節でコト埋め込み文の位置付けについて検討を行い、続く5節で3節、4節の議論に基づく「情報リソースを示す文型」の体系を示す。

### 3. ト引用文とニヨルト文、ヨウニ文

ニヨルト文は「引用者が知識として持っている情報をその情報源とともに提示する文」であり、田野村忠温 (1990) による平叙文の分類である「推量判断実践文」(= (5a)) と「知識表明文」(= (5b)) のうちの後者に情報源を表すニヨルト／ニヨレバが付されたものを指す。

- (5) a. (あの風体からすると) あの男はヤクザだ。  
 b. (聞いた話では) あの男はヤクザだ。 (田野村忠温 1990 : 785)

- (6) 奥津敬一郎 (1996) によると、「クラスを代表する名詞であれば自由に数量表現をとることができる」。

他方、ヨウニ文は文法研究で「比況」を表すとされてきた文のうち、前田直子 (1994) が「先行する発話や記述、あるいは一般的な知識などを確認するための前触れの表現 (pp.71-72)」とするものの一部である。以下に、前田直子 (1994) で挙げられている例をいくつか挙げておく<sup>5</sup>。

- (7) Gホテルは、女中が言ったように、堀江の旅館からすぐであった。  
 (8) さっき話したように、ドイツの全体主義には、よかれあしかれ、理論的に構成された観念があった。  
 (9) 後に詳しく述べるように、日本人は宗教にあまり関心がない。  
 (10) これまでこの本の中で書いてきたように、西ヨーロッパの諸国は、大体において外から流入するものを受け入れる際の自分の形式をもっていた。  
 (11) が、昨夜も反省したように、ずるずるとこのままというのは避けねばならないと思う。

(前田直子 1994 : 72-73)

前田直子 (1994 : 73) によれば、上記の「確認の前触れの表現」の前件の動詞は「[言う・述べる・説明する・指摘する]」のような発言動詞だけでなく、文的目的語を取る動詞なら可能であり、〈中略〉「書く・見る・示す」や、思考を表す「考える・わかる・知っている・想像する・予期する・反省する」等の動詞における場合もある (p.73)。このうち、アカデミック・ジャパニーズにおける「引用」で用いられるのは、「述べる／主張する／指摘する／説明する」などの動詞である。

- (12) 奥津敬一郎 (1996) が {述べている／主張している／指摘している／説明する} ように、絶対敬語ではない現代日本語では身内を見上げることは許されない。

また、前田直子 (1994) は、「前件と後件という二つの事象が等しく成立する・事実である、ということを示す (p.70)」とする「同等用法」と「確認の

「前触লেরな表現」の関係を以下のように図示している。

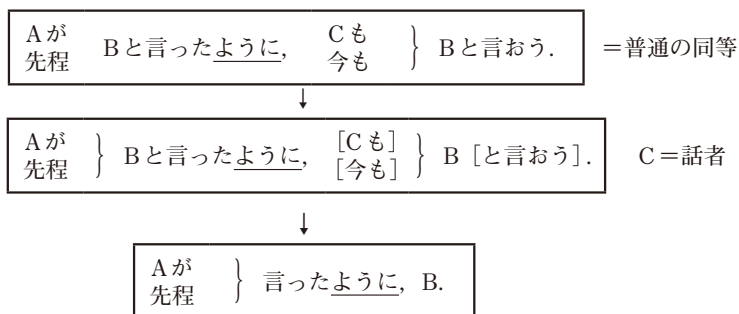


図2 「同等用法」と「確認の前触লেরな表現」の関係（前田直子 1994 : 73）

前田直子（1994）に従うならば、「引用」と解釈されるヨウニ文は「先行研究の知見を引用者が事実として認識しているものとして再び述べる文」ということになる。

ニヨルト文とヨウニ文の意味的な共通性は「先行研究で示されている知見を、引用者自身を経由させてから提示する」、つまり、「引用者自身の立場を含む形で引用部を提示する」という点にある。

- (13) a. 奥津敬一郎（1996）によると、「クラスを代表する名詞であれば自由に数量表現をとることができる」。（再掲＝(6)）
- b. 奥津敬一郎（1996）によると、「クラスを代表する名詞であれば自由に数量表現をとることができる」という。
- (14) a. 奥津敬一郎（1996）が述べているように、絶対敬語ではない現代日本語では身内を見上げることは許されない。
- b. 奥津敬一郎（1996）も述べているように、絶対敬語ではない現代日本語では身内を見上げることは許されない。

(13b) はニヨルト文に「伝聞」を表すとされる文末形式トイウを付したものであるが、文全体が「伝聞」として解釈されるのではなく、(13a) と比べて引用者が先行研究による主張から距離を置いているというニュアンスで解釈される。

次に (14) を見てみる。(14b) はヨウニ文で示される先行研究をモでとりたてた文である。ヨウニ文は、先述のとおり、「先行研究の知見を引用者が事実として認識している」ことを表すが、とりたて詞モが付くと、(14b) のように「引用者自身の知見と同じ知見が先行研究でも述べられている」ということを表すようになる。

一方、ト引用文は「先行研究の知見を先行研究の知見そのものとして再現する文」であり、引用者自身の立場が含まれるということはないため、文末形式トイウを付加すれば文全体が「伝聞」として解釈されるようになり、また、「モ」でとりたててもヨウニ文のような意味が生じることはない。

- (15) a. 奥津敬一郎 (1996) は「クラスを代表する名詞であれば自由に数量表現をとることができる」と述べている。  
 b. 奥津敬一郎 (1996) は「クラスを代表する名詞であれば自由に数量表現をとることができる」と述べているという。  
 c. 奥津敬一郎 (1996) も「クラスを代表する名詞であれば自由に数量表現をとることができる」と述べている。

この「引用者自身の立場を含むか否か」という点は、ト引用文が埋め込み構造内で引用部を示すのに対し、ニョルト文とヨウニ文は、文副詞による修飾と従属節による修飾という違いはあるものの、ともに引用部を知識表明文で示すという文型の形式的・文法的な相違に基づくものと考えられる。

以上、ト引用文とニョルト文、ヨウニ文の相違について論じてきたが、本節の最後に 2 節で概観した先行研究の一つである山本富美子・二通信子 (2015) の引用表現の分類について再考する。

山本富美子・二通信子 (2015) の分類では、ト引用文とニョルト文が「A. 中立的引用文」と「B. 解釈的引用文」の両方に位置付けられていた。以下に、山本富美子・二通信子 (2015) で示されている形式的特徴を関連部分のみ再掲するとともに、それぞれに該当するト引用文とニョルト文の例文を示す。

- (16) 中立的引用文：《～ハ／ニヨレバ＋直接／間接引用部＋ト＋「いう、述べる、記す、書く、ある」》  
 a. 奥津敬一郎 (1996) は「クラスを代表する名詞であれば自由に数量表現をとることができる」と述べている。



- b. 奥津敬一郎 (1996) によれば「クラスを代表する名詞であれば自由に数量表現をとることができる」という。
- (17) 解釈的引用文：《(副詞句／節) +～ハ／ニヨレバ+直接／間接引用部 +ト+「いう、述べる、記す、書く、ある」以外の動詞》
- a. 蔣は「全く関係がなく、ほとんど変えないに等しいもので、私の提案する改革案をおおなりにするためである。これはみな胡漢民の発意によっている」と不満を募らせている。
- (山本富美子・二通信子 2015 : 99 改)
- b. 奥津敬一郎 (1996) によれば「クラスを代表する名詞であれば自由に数量表現をとることができる」。

山本富美子・二通信子 (2015) の分類で重視されているのは、論理展開を構築する引用者の「解釈」である。山本富美子・二通信子 (2015 : 99-100) にはニョルト文に関する説明はないが、ト引用文である (17a) については「この引用内容に対して論文筆者は〔蔣介石が不満を募らせている〕と解釈し、この視点から筆者独自の論に展開していく」という説明が見られる。しかし、ニョルト文については、(16b) (17b) を見る限り、トイウの有無と山本富美子・二通信子 (2015) の言う「解釈」の有無が対応しているとは捉えられない。加えて、ヨウニ文を山本富美子・二通信子 (2015) の分類に当てはめた場合、本節で指摘したようなニョルト文との共通性があるにもかかわらず、トを持たないため、引用文ではなく「C. 引用解釈的叙述文」に位置付けられてしまう<sup>6</sup>。

以上から、山本富美子・二通信子 (2015) のように論理展開を重視していたとしても、各文型の文法的な性質に目を向けなければ、適切な引用表現の分類は困難であると言える。

#### 4. ト引用文とコト埋め込み文

前節では、ト引用文とニョルト文、ヨウニ文が「引用者自身の立場を含むか否か」という点で対立しているということを示した。本節では、ト引用文とコト埋め込み文の関係について考察を行うが、まず、コト埋め込み文が「引用者自身の立場を含むか否か」について確認しておく。

- (18) a. 奥津敬一郎 (1996) は「クラスを代表する名詞であれば自由に

数量表現をとることができる」ことを指摘している。

- b. 奥津敬一郎 (1996) は「クラスを代表する名詞であれば自由に数量表現をとることができる」ことを指摘しているという。
- c. 奥津敬一郎 (1996) も「クラスを代表する名詞であれば自由に数量表現をとることができる」ことを指摘している。

コト埋め込み文では、ト引用文と同様に、トイウを付すと「伝聞」解釈となり、また、モでとりたてた場合に「引用者自身の知見と同じ知見が先行研究でも述べられている」という意味が生じることもない。したがって、コト埋め込み文は「引用者自身の立場を含むか否か」という点については、ト引用文と同じくそれを含まないものということになる。これは、コト埋め込み文が、知識表明文ではなく、ト引用文のように埋め込み構造を用いて引用部を提示するためであると考えられる。しかし、この現象は、コト埋め込み文がニョルト文、ヨウニ文と性質を異にするということの意味しているだけで、コト埋め込み文がト引用文と同じであるということの意味するわけではない。

ト引用文とコト埋め込み文の文法上の相違について、砂川有里子 (2003) は (19) (20) のような例を挙げて説明を行っている。

- (19) a. 太郎は花子とつきあわなければよかったと後悔した。
- b. 太郎は花子とつきあわなかったことを後悔した。
- (20) a. 太郎は花子とつきあわなかったと否定した。
- b. 太郎は花子とつきあったことを否定した。

(砂川有里子 2003 : 129)

(19) (20) からも明らかなように、両者は置換可能な場合があるが、(19a) の「花子とつきあわなければよかった」は後悔したときに太郎の心に浮んだことばを、(20a) の「花子とつきあわなかった」は否定の発話内容を表現しているというように、「ト」が承ける節は発話や思考の内容を表すのに対し、(19b) (20b) において「コト」が承けている節は思考や発話の内容ではなく、後悔の念や否定的言明のような心的作用が向けられる対象を表す。そのため、補文標識「こと」が用いられた文型は、単に動作・作用が向けられる対象として概念化されたことがらを表すに過ぎず、文法研究における引用論を考える上で重要な「再現」という働きは認められないというのが砂川有里子 (2003)

の主張である。

砂川有里子（2003）の主張の妥当性は、次のような観察からも支持される。

ト引用文における引用助詞トは引用部の内部には入り得ない。たとえば、次に示す（21）の下線部<sup>7</sup>をト引用文で引用するとする。

- (21) したがって、金融機関のなかでも貸出全体に占めるシェアの大きい全国銀行の貸出行動を分析することは、金融市場全体として生じた「貸し渋り」現象を解明することに繋がると考えられる。

(BCCWJ：堀江康熙『銀行貸出の経済分析』)

この場合、トは（21）の「考えられる」の前にある引用元のものを用いるのではなく、引用部の外に引用者のことばの一部として示す必要があり（＝(22a)）、（21）のトを用いた文は許容されない文となる（＝(22b)）。

- (22) a. 堀江康熙は、「金融機関のなかでも貸出全体に占めるシェアの大きい全国銀行の貸出行動を分析することは、金融市場全体として生じた「貸し渋り」現象を解明することに繋がる」と述べている。  
b. \*堀江康熙は、「金融機関のなかでも貸出全体に占めるシェアの大きい全国銀行の貸出行動を分析することは、金融市場全体として生じた「貸し渋り」現象を解明することに繋がると」述べている。

これに対し、コト埋め込み文の場合、コトは引用者が新たに引用者のことばの一部として示しても引用元のものを用いてもどちらも問題なく許容される。

- (23) 『傾城禁短気』の出版が延引した理由は不明であるけれども、『傾城禁短気』が従来の八文字屋本とは書型を異にしていることが指摘できる。  
(BCCWJ：長友千代治『江戸時代の図書流通』)

- (24) a. 長友千代治は、「『傾城禁短気』の出版が延引した理由は不明であるけれども、『傾城禁短気』が従来の八文字屋本とは書型を異にしている」ことを指摘している。  
b. 長友千代治は、「『傾城禁短気』の出版が延引した理由は不明であるけれども、『傾城禁短気』が従来の八文字屋本とは書型を異にしていること」を指摘している。

ここからも、トとコトの文法的な機能が異なることがわかる。

ト引用文は「再現」を表すトを構成要素に持つことで「引用」解釈を生じさせる。それに対し、コト埋め込み文はそのような特別な要素を持たない叙述文である。また、先に見たように、その構造はニヨルト文、ヨウニ文とも異なる。そのため、叙述文であるコト埋め込み文が「引用」と解釈される要因については、ト引用文ともニヨルト文、ヨウニ文とも異なる理由を与えなくてはならない。では、コト埋め込み文はどのようにして「引用」と解釈されるのか。

ト引用文では、述語が「述べる／主張する／説明する」など以外の動詞であり、かつ、要約引用の場合でも「引用」と解釈される(= (25b))。

- (25) a. ところが、花袋は、美知代の書いた小説「青春譜」を《主観的》・《感情的》で《少しも客観に正しく見た処は無い》と非難し、《此物語はまだ書くには早いでせう》と執筆を差し止めてしまったのである。

(有元伸子「〈作者〉をめぐる攻防」『日本近代文学』88)

- b. 花袋はこの物語を書くにはまだ早いでしょと執筆を差し止めてしまったのである。

一方、コト埋め込み文の場合、述語が「述べる／主張する／説明する」などの場合は要約引用でも「引用」と解釈されるが、それ以外の動詞の場合は「引用」と解釈しにくくなる。

- (26) a. 奥津敬一郎(1996)は絶対敬語ではない現代日本語では身内を見上げることは許されないことを指摘している。
- b. 奥津敬一郎(1996)は絶対敬語ではない現代日本語では身内を見上げることは許されないことを明らかにした。

さらに、情報リソースを指示する名詞を削除すると、述語が「述べる／主張する／説明する」などであっても「引用」と解釈するのは(26a)よりも難しくなり、それ以外の述語の場合に至ってはもはや「引用」解釈はできなくなる。

- (27) a. すでに、絶対敬語ではない現代日本語では身内を見上げることは許されないことが指摘されている。

- b. すでに、絶対敬語ではない現代日本語では身内を見上げることは許されることが明らかにされている。

以上より、叙述文であるコト埋め込み文の「引用」解釈は、ト引用文のように構成要素の文法的機能によって生じるのでも、ニョルト文やヨウニ文のように自身の知識を示す知識表明文と情報源が組み合わせることで生じるのでもなく、埋め込み構造を有していること、述語が「述べる／主張する／説明する」などであること、情報リソースを指示する名詞があることという条件が揃うことで生じると捉えることができる。

藤田保幸（2000：19-20）によれば、言語は「昔から用いられてきたコトバをまた組み合わせて用いているに過ぎ」ず、「我々は、意識的に、あるいは無意識に他者のコトバを織り込み組み合わせながら、自らの言表を形成」し、「自らのコトバとして、そうした言表を表出するが、その成り立ちにおいては、他者のコトバにあたるものが組み込まれている場合が少なくない」。言語がこのような性質を持つならば、コト埋め込み文を含むすべての叙述文が「引用」と解釈される可能性があり、先行研究を参照することで得られた情報を基にしているであろう（26b）（27b）は特にその可能性を強く持つものとして捉えられる。実際、（26b）（27b）のような文は、二通信子（2009）の「間接引用a」、山本富美子・二通信子（2015）の「C. 引用解釈的叙述文」に該当するといったように引用表現とその外側との境界付近に位置付けられている。しかし、言語が藤田保幸（2000）の述べるような性質を持つ以上、叙述文であるコト埋め込み文については何らかの基準を設けて線引きをしておく必要があり、本稿では、アカデミック・ジャパニーズにおける引用表現の中でコト埋め込み文を考える場合には上述したような条件をその基準として設定することが有効であると考える。

## 5. 「情報リソースを示す文型」の体系

ここまで、ト引用文と比較する形で、ニョルト文、ヨウニ文、コト埋め込み文の位置付けについて論じてきた。それらをまとめると、【図3】のようになる。

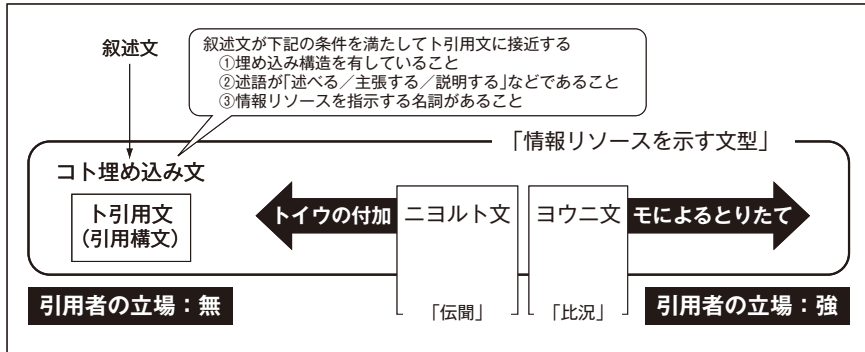


図3 「情報リソースを示す文型」とそれに隣接する文型

「情報リソースを示す文型」の中で、文法的な「引用」を表すのはト引用文のみであり、他の文型は構成要素の組み合わせで「引用」解釈を生じさせているため、「情報リソースを示す文型」の外側とも接点を持つ。【図3】では、その点を縦の軸で示している。一方、横の軸は「引用部を提示する際に引用者の立場が示されるか否か」を表す。ト引用文、コト埋め込み文は引用者の立場を含まない引用表現である。一方、ニヨルト文とヨウニ文は引用者の立場を含むが、前者は文末形式トイウを付加することでその程度を弱く、後者はモによるとりたてを行うことでその程度を強くすることが可能である。この横の軸が示す関係性は山本富美子・二通信子（2015）のいう論理展開に作用する、具体的に言えば、右に行くほど引用者の論に近い内容を提示する際に用いられる可能性が高い。よって、アカデミック・ジャパニーズにおける引用表現をテキストレベルで検討する際には、【図3】の横の軸を中心に検討することが有効であると考えられる。

## 6. おわりに

以上、本稿では、ト引用文、コト埋め込み文、ニヨルト文、ヨウニ文を「情報リソースを示す文型」として取り上げて、典型的な引用表現であるト引用文と他の文型との比較を行い、それぞれの文型の文法的な特性を考慮した表現体系を示した。本稿で行ったのは、文法的な体系とは異なる、「他者の知見を、自身の知見に対して相対的に位置付け、反論・援用するために導入する言語行

為」としての「引用」というタスクを実行するための表現体系の構築である。このようなことは従来の研究でも行われているものであるが、多くの場合、文法研究の成果は批判的に捉えられる。しかし、本稿で繰り返し述べているように、個々の言語要素が持つ文法的な性質を考慮に入れなければ、適切な分類や体系化は不可能である。この点を多少なりとも示すことができたのなら、本稿の目標の大半は達成されたと考えることができる。

一方、本稿には課題も残されている。

まず、コト埋め込み文が「引用」と解釈されるための三つの条件を示したが、述語に関する条件については、動詞を特定しなくては十分とは言えない。これについては、改めて調査を行い、より精緻な条件を明らかにしたい。

また、本稿では取り上げられなかったが、「～に…という {主張／指摘／説明／言及} が {ある／見られる}」といった文型も「情報リソースを示す文型」として捉えることが可能である。この文型は「机の上に本がある」「夜空に星が流れる」などと同じ存在文であるため、コト埋め込み文と同じように、複数の条件が揃うことで「引用」の解釈が生じると考えられる。しかし、興味深いのは、コト埋め込み文よりもト引用文に近い振る舞いを見せるという点である。

- (28) a. 奥津敬一郎 (1978) は「[ダ]の有無によって男女体と女性体のちがいが生ずる、とするのが妥当な解釈だと思う」と主張している。
- b. \*奥津敬一郎 (1978) は「[ダ]の有無によって男女体と女性体のちがいが生ずる、とするのが妥当な解釈だと思う」ことを主張している。
- c. 奥津敬一郎 (1978) に「[ダ]の有無によって男女体と女性体のちがいが生ずる、とするのが妥当な解釈だと思う」という主張が見られる。

(28) は原著者の判断を表す「と思う」という要素を含む文を各文型で引用したものであるが、述語もしくは底名詞が同じ「主張」という語であるにもかかわらず、コト埋め込み文のみが非文法的となる。この相違には、(28c) が内容補充の連体修飾であることが関与していると思われるが、詳細な分析と(28c) のような文の「情報リソースを示す文型」内での位置付けについては今



後の課題としたい。

## 注

- 1 「アカデミック・ジャパニーズ」という用語は、広義には、「日本の大学での勉学に対応できる日本語力（門倉正美 2006：3）」を指すが、本稿では、「書く」能力に特化した意味合いで用いている。
- 2 本稿では、「ニヨルト」と「ニヨレバ」を同じものとして扱っている。
- 3 「「～は以下のように主張している」といった表現で文献名を導入し、後続する文でそれらの内容を詳しく紹介する」という説明が加えられている。
- 4 清水まさ子（2009：5）では、「「～によると、～によれば、～ように」を用いて引用文献を紹介して、後続する文が間接的な引用となっている表現方法」とされている。
- 5 (7)～(11)の下線は前田直子（1994）に従っている。
- 6 正確に言えば、ニヨルト文も、トを持たないため、山本富美子・二通信子（2015）では「C. 引用解釈的叙述文」に位置付けられることになる。
- 7 出典を記した用例への強調は引用者による。

## 参考文献

- 門倉正美（2006）「〈学びとコミュニケーション〉の日本語力 —アカデミック・ジャパニーズからの発信—」門倉正美・筒井洋一・三宅和子（編）『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』pp.3-20 ひつじ書房
- 清水まさ子（2008）「文系論文における引用文の表現方法」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』14, pp.1-15 日本女子大学
- 清水まさ子（2009）「異なる専門分野における引用文の表現方法 —5種類の人文系論文を比較して—」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』15, pp.1-11 日本女子大学
- 砂川有里子（2003）「話法における主観表現」北原保雄（編）『朝倉日本語講座5 文法Ⅰ』pp.128-156 朝倉書店
- 田野村忠温（1990）「文における判断をめぐって」崎山理・佐藤昭裕（編）『アジアの諸言語と一般言語学』pp.785-795 三省堂
- 二通信子（2009）「論文の引用に関する基礎的調査と引用モデルの試案」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』1, pp.65-74 アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会
- 藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院
- 藤田保幸（2003）「伝聞研究のこれまでとこれから」『言語』32-7, pp.22-28 大修館書店
- 前田直子（1994）「「比況」を表わす従属節「～ように」の意味・用法」『東京大学留学生センター紀要』4, pp.59-82 東京大学留学生センター
- 山本富美子・二通信子（2015）「論文の引用・解釈構造 —人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究—」『日本語教育』160, pp.94-109 日本語教育学会



### 参考資料

『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』, 国立国語研究所, 2011 年  
「〈作者〉をめぐる攻防 —田山花袋「蒲団」と岡田美知代の小説—」, 有元伸子,  
2013 年, 『日本近代文学』 88, pp.33-48 日本近代文学会

### 用例作成に用いた文献

奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハウナギダ」の文法』 くろしお出版  
奥津敬一郎 (1996) 『拾遺 日本文法論』 ひつじ書房